

味噌川ダムと木曽川源流の村

連載
第3回

味噌川ダム竣工と木祖村民の関わり

NPO法人 木曽川・水の始発駅 岩原 大輔

(1) 味噌川ダム建設工事着工

味噌川ダムの建設は、工事用道路、林道付替工事、河川改修工事から着手され、その進捗を図りつつ本体工事へと進められました。

味噌川ダムの本体工事契約は昭和 57 年 8 月末日に締結、10 月 19 日の 1 号仮排水トンネルの掘削を皮切りに本体工事が着手され、昭和 46 年の建設省予備調査から実に 11 年、事業実施方針指示から 3 年後の本体工事の着工となりました。

62 年 8 月に多くの関係者の出席のもと、ダムサイトにおいて本格的な盛立てを前に、工事施工の安全と早期完成を祈願する定礎式が行われました。

記念式典は、地域の郷土芸能が披露されるなど盛大に執り行われ、木曽川下流の愛知・岐阜・三重の各県代表者の方からは「命の水の源を中心に、流域は運命共同体として協力していきましょう」と挨拶されました。



礎石鎮座 (S62年8月)

(2) 岩盤掘削から本体盛立て

味噌川ダムが建設される地点は、標高 1,000m と日本の多目的ダムの中では当時最も高い位置にあり、最低気温が -20°C 以下まで下がるときもあるなど非常に厳しい気象環境下にありました。また、ダムサイト付近は砂岩、粘板岩とその互層からなる複雑な地質構造で、全体に割れ目が多く、風化が深部におよぶなど、厳しい気象・地質環境を克服しながら建設が進められました。

本体の盛立てに先立って、堤体の最深部となる基礎岩盤に到達するまで表土や緩い岩盤を取り除く作業が行われ、その掘削土石量は 200 万 m^3 にも及び、ダム直下の大原・笹尾沢・宮の森など村内の土捨て場に運ばれました。これら土捨て場の跡地は、農地・林地・公園等に有効利用されています。

また、掘削によって現れた強固な岩盤の地中には、更に遮水性を高めるための「基礎処理」という工程で、岩盤内にセメントミルクが注入されましたが、この注入のために開けた削孔の総延長は 330km というとても長い長さになるほど入念な処理が施されました。

この岩盤を基礎として盛立てられる堤体の中央部は、コア材と呼ばれる遮水性に優れた粒子の細かい土からなり、村内の西山地区「こだまの森」から採取、フィルター・ロック材と呼ばれるコア材を覆い保護する岩石は、^{やづめげんせきやま} 矢詰原石山と笹尾沢奥の原石山から採取され、40t ダンプで堤体盛立て部まで運搬されました。

ダム工事で使われた岩石や土は約 800 万 m^3 、11t トラックに積んで並べると地球半周に相当するといわれています。

昭和 62 年から始まった本体盛立て工事は、大雨や冬場の凍結と降雪時に工事ができないことから、限られた工期を守るために工事施工には大変な苦勞があったようで、盛立ての最盛期にはブルドーザーやダンプトラックなど、実に 130 台もの重機で作業を進め、平成 5 年 6 月 3 日、最後のダンプが荷を下ろしダム本体の盛立て工事が終了しました。



ダム堤体の基礎処理(ダム右岸)(S62年9月)



ダンプが最後のコア材を下ろす(H5年6月)

(3) 試験湛水式

試験湛水式は、ダム工事がほぼ終わった平成 5 年 12 月 10 日に行われました。湛水式を見学した S さんの話です。

…私は対岸から眺めていましたが、試験といっても、今後、湖底まで水を抜くことは無いということですので、湖底を見るのはこれが最後と思うと感慨無量でした。正午少し前でした。クレーン車に吊られた朱色のゲートがゆっくりと降下し、やがて水しぶきが上がるのが見えました。花火が打ち上げられ無事ゲートが収まって試験湛水が始まりました。味噌川の源流から流れてくる水がだんだん溜まりはじめ、この瞬間からここに一大ダム湖が出現することを思うと不思議でした。…

ダム湖のシンボルマークも決定し、「おくぎそこ奥木曾湖」と命

名されましたが、満水となって名実ともに「奥木曾湖」が実現したのは平成 8 年 4 月 27 日でした。

この奥木曾湖は、平成 17 年に地方自治体の首長の推薦により、地域に親しまれ地域にとってかけがえないダム湖を、より一層地域の活性化に役立てることを願って、「全国ダム湖百選」にも選定されています。

(4) 味噌川ダム竣工式

平成 8 年 8 月 28 日、25 年の歳月をかけて、木曾川最上流の味噌川に「味噌川ダム」が竣工しました。

竣工式当日は前日から続く大雨となりましたが、この雨は恵みの雨となり、それまでの木曾川の給水制限を一気に解除することができました。

竣工式では、歴史的な事業となったダム完成までの歩みを伝える催しや、木曾川上下流の子どもたちの交流をテーマにした催しが行われ、多くの参加者たちから盛大な拍手が送られました。

こうして、木祖村に新たなシンボル「味噌川ダム」が誕生し、会場内では「このダムにより、将来に渡って多くの人々の暮らしに役立ってほしい」との想いで満ち溢れていました。



雨降りの中の味噌川ダム竣工式(H8年8月)

(5) ダム建設と木祖村民の接点

① 村民のダム見学会

本体の盛立てが完了した頃に行われた村民を対象にしたダム見学会には、木祖村の人口の 17% にあたる 660 人もの村民が参加し、着々と建設が進むダムに対する村民の関心の高さがうかがえました。

平成 5 年 5 月 22 日に行われた見学会に参加した

村民の、Mさんの感想です。

…ダム見学会の当日はどんよりと曇った日でした。個人的には工事中の味噌川ダムは展望台から何回か見たことはありましたが、完成間近のダムを身近に見る機会はもちろん初めてです。バス3台で大賑わいでした。立派な道路を走るのも珍しく、時折、右下に味噌川の流れを眺めることができましたが、あまりに谷が深くてびっくりしました。全長184mの奥木曾大橋を渡るときも、同乗の皆さんから驚きの声があがりました。タカ回りのトンネルを通過して国有林のゲートのあるところまで連れてってもらいましたが、この辺りは以前の姿のまま、よく釣りに入ったことがあり当時を思い出して懐かしかったです。下って最後は提体に張り付けられた大きな石を積み上げた壁を登りましたが、実際に登ってみると意外に距離があり、高齢の皆さんはお互いに手を引き合いながら登っていました。斜度18度、天端まで350mということでしたが、実際に登ってみてダムの大きさを肌で感じることができました。…

こうした村民を対象にした見学会は竣工後まで何回も行われ、多くの村民が味噌川ダムの施設や湖上からの風景を見られたことで、刻々と変わっていくダム建設現場の状況を把握することができました。

②味噌川ダム湖底キャンプの開催

平成2年8月、味噌川ダム建設所は、木祖村の小学生を中心にダム建設現場に招待し、やがてダム湖底となる場所で「湖底キャンプ」を開始しました。ダムの必要性はもとより、水に親しみ、水の大切さを知ingことを目的としたもので、第1回目は8月4日から5日にかけて行われ、木祖村の小学生と保護者、村内関係者60数名が招かれました。ダム建設用の重機の見学をしてから、将来立ち入ることができなくなるダム湖底を流れる川で、釣りや魚のつかみ取りをしました。そして夕暮れ時からはキャンプファイヤーや花火も楽しみました。

湖底キャンプは湛水前の平成2年から5年まで開催され、多くの人々がダム湖底でのキャンプを通じ、味噌川ダムに親しむ機会となりました。

この企画は大好評で、ダム竣工年の平成8年からは、木祖村・友好自治体提携を結んでいる愛知県日進市・味噌川ダム管理所の3者により「上下流のふれあいを

推進する会」が組織され、湖底キャンプを発展的に継承した「サマーキャンプ in KISOGAWA」が行われるようになりました。現在でも、毎年夏に木曾川下流域の名古屋市や日進市の子どもたちが木祖村を訪れ、木祖村の子どもたちとの交流を続けています。



サマーキャンプ in KISOGAWA

③「平成日進の森林」^{へいせいにつしん もり}がつなぐ日進市と木祖村の交流

木祖村と愛知県日進市との交流は、昭和58年1月の木祖村商工会青年部の視察研修会がきっかけで相互交流が始まり、平成4年4月に木祖村と日進町（現：日進市）が「友好自治体提携」を結び今日に至っています。

木祖村と日進市はこの自治体提携を機に、味噌川ダムを活用することで、下流の人びとに対して森林保護と水源涵養、そして水の大切さとダムの必要性を理解してもらおうとともに、交流人口を増やし地域振興と活性化に向け、「水」を絆とした交流を深めてきています。

平成5年4月には、森林資源の育成と市民の自然体験の場として、味噌川ダム左岸の国有林約32haを「平成日進の森林」として、長野営林局（現中部森林管理局）と日進町が分収造林契約を結びました。

日進市では「森づくり基金」を設定して事業を推進し、木祖村もこれに協力し、毎年行われる植樹祭や育樹祭には両市村の住民が参加して行われています。多い年には250人ほどが参加し、平成5年から10年までに95,400本の木曾ヒノキが植林されています。

10年5月12日の植樹祭で植林事業が終了し、現在は育樹としてカモシカの食害防止や下草刈り、枝打ちなどの作業をしています。太い木は植林から約20年

ほど経っており直径10cmほどに育っています。平成13年11月にはこれまでの活動に対し「平成日進の森林」に「ダム建設功績者表彰」が贈られています。



木祖村・日進市合同植樹祭

(6)地域の「情報・学習・文化・交流」の発信基地

ダムが竣工した平成8年には、「木曾川源流ふれあい館（現：「味噌川ダム防災資料館」）と「柳沢尾根公園」も完成しました。

この「木曾川源流ふれあい館」はダム堤体左岸に建設され、来訪者の憩いの場所でもあり、ダム周辺の自然を身近に見たり感じたり、地域の暮らしや文化を学習する拠点として地域の人びとに広く活用されています。

一階には見学説明会場や講演会・作品展示ができるホールがあり、二階には壁画とジオラマで木曾川源流に生息するヤマトイワナやアマゴなどの動植物のほか、この地の自然と暮らしを表現した「源流の森」を見ることができます。さらに同階奥の床には、3万分の1の衛星航空写真で、木曾川流域から河口までをたどることができるほか、現在ではダムの防災業務に関する理解を深めるための展示コーナーが設けられています。

この「木曾川源流ふれあい館」が有効活用されていることは、入館者の多いことでも知ることができます。多い年は約1万人、平均6～7千人の人が訪れ、平成22年11月に入館者が10万人に達しました。

一方、「柳沢尾根公園」はダム湖を一望できる高台にあって、ダム工事のシンボルでもある、「源流愛語碑」が建っています。



木曾川源流ふれあい館(味噌川ダム防災資料館)

この場所からは南に木曾駒ヶ岳を望み、眼下に木祖村^{おぎそ}小木曾^{やぶほら}、藪原の集落も展望することができ、春はヤマツツジが

咲き乱れ、夏は涼風を受け、秋は紅葉とさまざまな自然を楽しむことができます。“あずまや”もあって絶好の眺望スポットとして休憩や語らいの場になっています。

味噌川ダムの建設は、「村民のダム見学会」、「味噌川ダム湖底キャンプ」、「平成日進の森林の植林、育樹作業」などの取り組みを通じ、常に木祖村民と一体となりながら進められました。そして、味噌川ダムが完成した現在でも、ダムを拠点とした上下流交流が継続され、「木曾川源流ふれあい館」を情報・学習・文化・交流の発信基地として、更に多くの人々から親しまれ、ダムの重要性についても理解を深めてもらうためのイベントなどにも活用されています。



柳沢尾根公園の源流愛語碑

参考文献

- 『味噌川ダム竣工記念誌 源流に歴史をきざむ』
水資源開発公団 味噌川ダム建設所 1996年11月
- 『味噌川ダム工事誌』
水資源開発公団 味噌川ダム建設所 1996年11月
- 『木祖村誌・源流の村の歴史(上)』
木祖村誌編纂委員会 2001年
- 『木祖村誌・源流の村の歴史(下)』
木祖村誌編纂委員会 2000年